

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	翻訳者としての永代美知代：『アンクル・トムの小屋』翻訳の背景とストウ夫人との共通項を中心に
Author(s)	守邦, 惟
Citation	表現技術研究 , 19 : 27 - 41
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55144
URL	https://doi.org/10.15027/55144
Right	
Relation	



翻訳者としての永代美知代

—『アンクル・トム的小屋』翻訳の背景とストウ夫人との共通項を中心に—

守邦 惟

はじめに

永代美知代は、一般的に田山花袋の「蒲団」に登場する女学生
のモデルとなった女性として言及されることが多い。しかし、彼
女自身も作家として新聞雑誌上に多くの作品を発表しており、美
知代の文学を研究する上でそれらは大きな比重を占める。¹⁾特に、「永
代美知代」の名前で執筆活動を行っていた一九〇九（明治四二）
年の長女出産から一九二六（大正一五）年の渡米までの時期には、
数多くの少女小説・児童向けの読物を発表している。²⁾その一方
で、美知代はこの時期に長編小説の翻訳も手がけている。美知代
は英語に長けており、単著として刊行した五冊のうちの二冊、『奴
隷トム アンクル・トムス・ケビン』（ストウ夫人原著、誠文堂、
一九二三年十二月）および『愛と真実 ジョン・ハリファックス』
（ミューラック夫人原著、誠文堂、一九二四年五月）は翻訳書である。
両者とも英語の長編小説であり、美知代がいかに英語に堪能であつ
たかが窺える。

本稿では、美知代の翻訳家としての側面に焦点を当てる。具体
的には、前者の翻訳書『奴隷トム アンクル・トムス・ケビン』

と美知代との関係を原著者や作品の時代背景など複数の角度から
分析する。

一 『アンクル・トム的小屋』の翻訳状況

美知代が『奴隷トム』を出版したのは一九二三（大正一二）年で、
三八歳のときである。そこから遡ること六年前に美知代は単著を
連続して出版しており（『ケーザル』『花ものがたり』）、その後連
載小説（『少女島』『角のある人』）を挟んで翻訳書の出版に至つて
いる。また、『奴隷トム』出版の翌年一九二四年には『愛と真実 ジョ
ン・ハリファックス』を出版しており、この時期は集中的に翻訳
活動を行っている。長編小説の翻訳書が連続して出版されている
ことから、二作品を並行して翻訳していた可能性も考えられる。

そして、この二冊の翻訳書を刊行し、雑誌に少女小説を一編発
表した後に渡米したため、その時点から長期に渡って執筆活動が
途絶えることになる。したがって、この翻訳書は精力的に執筆活
動を行っていた時期の最後にあたり、この翻訳活動は一つの区切
りと言えるだろう。また、翻訳直後に渡米したことを考えると、

この翻訳活動は渡米後の生活を想定して取り組まれ始めた可能性もある。つまり、英語運用のための種のある種の訓練を兼ねた翻訳だったのかもしれない。

なお、『アンクル・トムの小屋』の翻訳としては、美知代訳『奴隷トム』が出版される以前に四回に渡って翻訳が発表されている。それぞれ、一八九六年に『トムの茅屋』（敬天牧童訳）、一九〇三年に『仁慈博愛の話』（志津野又郎訳）、一九〇五年に『黒人トム』（桜井鷗村訳）、一九〇七年『奴隷トム』（百島冷泉訳）である。それらに続く美知代訳『奴隷トム』は翻訳の上で部分的に省略が行われているもの、原著の最終章を除く全ての章が翻訳されており物語の全体をしっかりと読み通すことができるものとなっている。また、美知代訳『奴隷トム』の出版以降も現代に至るまで児童向けの抄訳を含めて実に九〇回を超える翻訳が行われており、二〇二三年にも最新の完全訳が出版されている。⁴⁾ このことから、この作品がいかに重要視されて読まれ続けてきたかがわかり、その流れの最初期に美知代訳『奴隷トム』は位置している。

二 背景となるアメリカ黒人史

美知代訳『奴隷トム』の序文では、奴隷制度は過去のものであるという表現が見られる。確かに、南北戦争および奴隷解放宣言という出来事に関して言えば、美知代が翻訳に着手した時点ですでに歴史上の事項となっている。その一方で、美知代は奴隷制度

そのものが廃止されたとしても、未だ根強い差別が残っていると説明している。

此の小説は（中略）当代の識者に訴へて奴隷解放の実をあげようとした問題小説である。そして忽ちその素志は貫徹し、南北戦争を惹起して奴隷制度は破壊されて了つた。

（中略）

奴隷解放と云ふ問題の必要を感じない今日、わざわざ訳して出版することもないが、全編を通じて人類のとるべき道と云ふものが、如何にもよく写し生されて居る。

（中略）

肉体の売買こそ禁じられて、牛馬物品同様に市場へ持ち出されて公売に付せられるやうな奴隷制度こそ行はれてゐないけれど、精神的に打たれ蹴られて、極端にまでしいたげられ過ぎなければならぬ人類が、現今にもない訳ではない。

（美知代訳、一〜四頁）

この美知代の説明は正鵠を射ている。単なる動産として扱われる奴隷たちが置かれていた状況は南北戦争後に撤廃されるものの、美知代訳『奴隷トム』が出版された一九二三年頃のアメリカは「ジム・クロウ」と呼ばれる非道な人種隔離の真つ只中であつた。ここで、ストウにより原著『アンクル・トムの小屋』が執筆されるに至つた背景を概観したい。

『アンクル・トムの小屋』まで

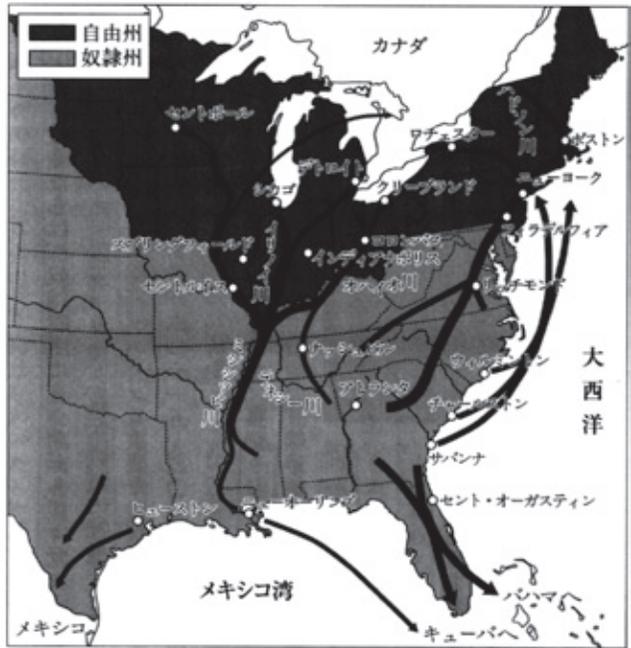
アメリカ大陸に多くの黒人奴隷が運ばれ始めたのは一六〇一七世紀にかけてであり、サトウキビプランテーションの労働力を確保することが目的だった。そして一八世紀末には綿花加工に技術



南北戦争時代のアメリカ合衆国

【図1】州の区分

革新が起こり、奴隷の需要が急増した。このようなプランテーションか



地下鉄道のルート (The National Geographic ウェブサイトの図を改変し作成)

【図2】逃亡のルート

【図1】【図2】ともにジェームス・M・バーダマン著、森本豊富訳『アメリカ黒人史』より

ら奴隷が脱走するのは珍しいことではなく、労働に抵抗する手段の一つであった。脱走は一日の数週間の短期間のもので、二度と戻るつもりのない逃亡があり、逃亡先は大半が北部の非奴隷州がカナダであった。少なくとも毎年五万人が逃亡したが、そのうち逃亡に成功し自由の身となったのは一〇〇〇〜二〇〇〇人であったという。逃亡の難しさは州によって変わり、『アンクル・トムの小屋』で描かれるのはケンタッキー州からの逃亡である。ケンタッキー州は奴隷州地域の最北端に位置し、オハイオ川さえ渡れば自由州であるオハ

イオ州に入るこ
とができたので
比較的逃亡が容
易であり、その
分逃亡のための
要衝ともみなさ
れた【図1】
2。一方でミ
シシッピやアラ
バマなど最南部
からの逃亡は困
難だったよう
ある。⁵⁾
制度としては
白人全員に黒人

に対して通行証を見せるよう要求する権利が与えられるなど奴隷逃亡の防止が図られる一方、逃亡した奴隷に援助の手を差し伸べる白人も存在した。代表的な支援組織は、キリスト教プロテスタントの一派であるクエーカー教徒によるものである。逃亡奴隷は協力者の家を転々としながら移動を続けるため、そのような道のりは比喩的に「地下鉄道」、隠れ家は「駅」と呼ばれた。『アンクル・トムの小屋』では、オハイオ州に逃れたエリザを、最初に匿ったボイド家から引き受けるのがこのクエーカー教徒の組織である。

この状況が一転するのは、一八五〇年に逃亡奴隷法が制定されたときである。これにより逃走中の奴隷を南部に返還するよう法的に定められたため、白人であっても奴隷解放論者は危険な立場となった。つまり、逃亡奴隷を故意に見逃す、手を貸すという同情に基づいた行いが違法となったのである。結果として、奴隷反対を訴えていた急進派の北部人たちも穏健派に転ずることとなった。⁶⁾

『アンクル・トムの小屋』の出版

こうした状況を背景として一八五一年に新聞連載が始まったのが、ハリエット・ビーチャー・ストウ著『アンクル・トムの小屋』(Uncle Tom's Cabin)である。翌年、連載終了後すぐに書籍として出版されると、一年で三〇万部を記録するアメリカ最大のベストセラーになる。⁷⁾なお、この発行部数に関しては美知代訳『奴隷トム』に関しても「発行二週目にして十五万部が売れた書物」として宣伝に用いられている。⁸⁾本書の影響はアメリカ国内にとどまらず、英国王室にも届いており、逃亡奴隷を配慮した英国王室は

カナダ国境の封鎖を行わないという決断をした。⁹⁾

ただし、この出版が南北戦争に直結したとする言説には注意が必要である。後に、南北戦争の途中でストウに会ったリンカーンが「では、この小さなご婦人が、この大戦争を引き起こした本を書いたのですね」と述べたという逸話も存在するが、そもそも南北戦争の要因は商工業を中心として近代的な資本主義社会を築いた北部と、植民地時代から続く黒人奴隷を使役しプランテーション農業を中心とする前近代的社会の南部との、社会的・経済的・政治的対立であり、それらは複雑に絡み合っている。そのため、単純に奴隷解放をかけて南北戦争が始まったのだ、と主張することはできない。

それでも、岸上が「政治的影響を直接与えたというより、一般大衆の関心を奴隷制度に向け、理解を深めさせ、その結果、反奴隷制度の高まりをもたらした」と説明しているように、広く読まれた『アンクル・トムの小屋』が北部人の奴隷制度批判をより強固にしたことは疑いようがない。この作品の広がりには、前述の逃亡奴隷法下においても、法律と人道の間で揺れる奴隷解放論者を奴隷制度撤廃の方へ後押しする一因となったはずである。

『アンクル・トムの小屋』の後

南北戦争後に奴隷制度こそ失われたものの、しばしば人命にも関わる非道な人種差別はアメリカ社会に残り続けた。一八七五年に公民権法によって国民の投票権や法的権利が保障されたが、生活の場に進出してくる黒人に反感を覚えた白人たちによって「ジ

ム・クロウ」という大規模な人種隔離政策が行われる。そして、一八九〇年代になると南部州では州憲法の改正により黒人の投票権を剥奪するに至るのである。このような「ジム・クロウ」の人種隔離は一九五〇年代まで続いたため、美知代訳『奴隷トム』が出版された時代は、まさにその隔離の最中となる。他にも、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけては黒人に対する数多くのリンチが行われていたほか、公共交通などに関する人種隔離法が可決されている。そのような状況下で美知代は一九二六年に渡米している。当然、少なからず渡航先の情報収集を行っていたことだろう。その過程で、アメリカで生じている非人道的な政策を耳にしていた可能性は十分にある。

アメリカ黒人が直面する差別は、奴隷として労働を強制された時代から今日に至ってなお、決して過去のものとは言えない。ブラック・ライブズ・マター (Black Lives Matter, BLM) というスローガンを耳にしたことがある人も多いだろう。二〇二〇年に、アメリカ・ミネソタ州で白人警察が黒人男性を拘束し窒息死させるといふ事件が起きた。この事件および事件に続く大規模なデモ活動は日本でも広く報道されたため、この事件をきっかけにしてBLM運動を知った人もいるのではないだろうか。美知代は『奴隷トム』の序で「精神的に打たれ蹴られて、極端にまでしいたげられ通さなければならぬ人類が、現今にもない訳ではない」と述べたが、それは二一世紀に入り四半世紀が経とうとする現在でも未解決の問題なのである。

『アンクル・トムの小屋』に対する批判

奴隷解放に大きな影響を与えたこの作品に対して、ある程度の批判も存在する。内容面ではあまりに感傷的すぎる点、物語の筋立てが稚拙である点、人物描写が類型にとどまり個性を描ききれない点などが批判されている。また、奴隷制度をキリスト教の精神によって解決できるものとして描くという、ある種の樂觀性もこの小説の限界とされる。同時に奴隷制度廃止という目的のための手段として作られた小説であるという点も、「プロバガンダ小説」としてこの小説に限界を見出す理由となっている。¹¹⁾

登場人物像についても批判がある。ひたすら信仰に生き、残忍で暴力的な白人に対しても非暴力に徹するトムのあり方に対しては批判も多く、「アンクル・トム」という名前自体が「白人に迎合する黒人への蔑称」として用いられることもあるため、発言に注意を要する言葉となっている。¹²⁾

三 『アンクル・トムの小屋』の作者ストウ夫人について

美知代と『アンクル・トムの小屋』の作者ストウ夫人を比較する前に、簡単にストウ夫人の紹介を行いたい。本名はハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ (Harriet (Elizabeth) Beecher Stowe) といひ、一八一一年生まれ一八九六年没、美知代が『奴隷トム』を出版する三〇年ほど前に亡くなっている。

生い立ち

一九世紀アメリカの宗教・思想界を代表する著名な一家であるビーチャー家に生まれ、父は牧師である。また、ストウ夫人の兄弟、夫、末子も牧師であり、自身も厳格な宗教的教育を受けて成長する。女学校で教職に就き、二四歳で結婚する（これは奇しくも、美知代が静雄と結婚したのと同じ年齢である）。結婚後も執筆を続け、家計を支える。ストウ夫人はオハイオ州シンシナティに住んでいた時期があり、オハイオ川を挟んだ対岸にあるケンタッキー州（奴隷州）で進行する逃亡奴隷たちの凄惨な人生を直接見聞きしていた。⁽¹³⁾

執筆活動

一八五〇年の逃亡奴隷法を契機に、『アンクル・トムの小屋』を執筆する。また、執筆活動のみならず奴隷制廃止運動や、解放奴隷のための学校・教会設立にも携わる。他の著作には社会・文化・生活に根ざした小説があり、詩、児童書、家事や育児など幅広いテーマのエッセイも執筆した。そうしたほぼ全ての著作には、キリスト教徒としての生き方の追求が通底している。

四 永代美知代と『奴隷トム』

ここからは、美知代がなぜ『アンクル・トムの小屋』を翻訳するに至ったのか、その動機として考えられるものを『アンクル・トムの小屋』に描かれている思想、そしてストウ夫人自身の生涯

と比較しながら考察を行う。本稿では、「子どもとの死別」および「家庭内での女性の主張」の二点に絞って考えたい。

その一 ストウの生涯、子どもとの死別に関して

『アンクル・トムの小屋』では数多くの家族の別離場面が描かれる。野口が「家族の別離というアナロジーが、白人読者に奴隷の苦しみを自分のこととして感じさせるための強力な武器となることに、ストーは気づいたのである」と述べるように、ストウは黒人奴隷への差別を打ち破るための一種のストラテジーとして「家族の別離」を描写していることがわかる。現在でこそ人種によって感情能力が異なるといった言説は荒唐無稽だと唾棄できるものの、奴隷制下のアメリカではそのような言説がまかり通ったのである。例えば、一八三三年にミシシッピ河で奴隷を運んでいた船が難破し鎖に繋がれていた奴隷が全員溺死するという事件があったが、当時の新聞には、奴隷は水に沈んで鎖の重さを感じることはもうないから嘆く必要はない、という記事が載り、それが奴隷に対する一般的な感覚であったとい⁽¹⁴⁾う。

そうした人種差別の感覚のなかで奴隷の家族構成に頓着しない売買が横行していたわけだが、奴隷主の一存で肉親との関係が引き裂かれる悲劇は作中で何度も描かれる。登場人物エリザもまた、幼い息子だけが売られ、離れ離れになることを知ったがために決死の逃亡を決意、実行するのである。エリザが必死の思いで流水の上を渡る場面は本作の山場としてしばしば言及されるが、これは離別への苦悩に加えて、不合理な離別から逃れるために発揮さ

れる母親の愛の強さが描かれている。もちろん、そこには人種に
関係ない、感情の普遍性を描こうとするストウの意図がある。

そのような奴隷にとつての別離と並行して、ストウは白人家庭に
も存在する家族との別離、具体的には幼い子どもを病気により亡く
す様子を描くことによつて共感を引き出そうとする。美知代と『奴
隷トム』との関係においては、この白人家庭の描写に注目したい。

以下は、エリザがオハイオ川を渡りきり、対岸にある白人家庭
に匿われた場面である。当時の感覚としてそれほど酷い労働環境
ではなかったセルビー家から逃げた理由を問われ、エリザは白人
の夫人メアリに問い返す。

女はキツと夫人を見上げたが、突然に云つた。

「奥様、お子様がおありで御座いませう。」

この質問は全く思ひがけもなかつた。だが愛児を葬つて、
まだやつと一月ばかりにしかならない此家の人達には、又
新たな悲嘆をそるゝものであつた。ボイドはつかつかと窓
際へ歩いて行つた。そして夫人はもう涙にむせんた。

(美知代訳、一一二頁)

この場面で、エリザは既に二人の子を失い、最後に残つた息子
さえも奪われようとしていることをボイド夫妻に訴える。そして、
子どもを亡くして間もない夫妻にとつての、子どもと別れること
に対する強い共感が描かれるのである。白人の主人ボイドは奴隷
に不利な法律を推進している議員だが、奴隷の置かれている悲惨

な現状を目の当たりにし、また妻メアリからの非難もあり、つい
に危険をおかしてエリザの逃亡を助ける。

また、物語の中盤から登場する、南部州の白人家庭の少女イバ
はキリスト教に基づいた強い博愛の精神を有している。最終的に
イバは肺結核を患い亡くなるのだが、イバの最期の言動や死は周
圍の人々に大きな影響を与え、改心を促す。イバは幼いが、偉大
な殉教者のように描写されているのである。以下は、イバ、そし
て夭折する子ども全般について述べられた部分である。

エヴァのような子供がいままでにいただろうか？ そう、

確かにいたことはいた。しかし、そのような子供の名前は
いつだって墓石に刻まれており、彼らのやさしい笑顔、神
聖な瞳、素晴らしい言葉や行為は、彼らを懐かしむ人々の
心のなかに埋め込まれた宝玉となつている。(中略) それは
まるで、天国には特別な一群の天使がいて、この世にある
時期滞在し、気まぐれな人間の心を自分たちへ惹きつけ、
その心とともに天国へ帰る役目を負わされているのではな
いかと思わせるほどである。もしあなた方が、子供の目に
深い神聖な光を見たようなとき、あるいはその子供が普通
の子供以上にやさしく賢い言葉で自らの魂を表わすような
ときには、その子供をこの世にとどめておこうと望んでは
いけない。なぜなら、その子供には天国の紋章がついており、
その目からは永遠の光が放出されているからである。

(小林監訳、三二二頁)

また以下は、イバの臨終の場面である。

セント・クレヤーが頭を上げたときエヴァの顔に死にゆく者の苦悩の痙攣が走るのを目にした。彼女は苦しそうに喘ぎ、小さな手を上に突き上げた。

(中略)

「どうかこれが早く終わりますように！」とセント・クレヤーは言った。「胸が張り裂けそうだ」

(中略)

エヴァは力を使い果たしたように、枕に身をもたせかけ、肩で息をしていた。大きく澄んだ目は上目となり、動かなかった。ああ、天国のことをあれほど多く語った目は、いまは何を物語っているのか。この世を去り、この世の苦しみも過ぎ去った。しかし、その顔の誇らしげな輝きは、むせび泣く悲しみさえ止めてしまうほどに荘厳で、神秘的だった。みんなは、息をのんで彼女のまわりに集まった。

(小林監訳、三五〇頁)

このように、『アンクル・トムの小屋』では子どもと死別する悲哀、そして避けられない子どもの死に対してキリスト教的な意味づけを行ったり価値を見出したりする描写が複数見られる。野口が指摘するように、このような描写には息子のチャールズを疫病で亡くしたストウ自身の経験が大きく影響している。¹⁶⁾ ストウが疫病で衰弱する幼い息子について語った手紙はストウの自伝に収録されて

いる。ストウが一八四九年に夫に向けて送った手紙には、臨終の際に苦しむ息子を見て、その苦痛を和らげるために何もしてやれない辛さ、そして助かる見込みのない息子が苦痛から解放されるために、早く死を与えてくれるよう神に祈ったことが綴られている。¹⁷⁾

この、幼い我が子を亡くすという経験は美知代にも共通するものである。¹⁸⁾ ただ、前二つの引用部分は美知代訳の『奴隷トム』においては省略されてしまっている。原著を翻訳する過程で、なぜこの描写を簡略なものにとどめたかは定かではない。翻訳の簡略化は『奴隷トム』全体を通して存在し、美知代が序で「沢山な読者の中には余りに耶蘇臭いので嫌だと思ふものもないではなからう(三頁)」と述べているように、過度にキリスト教の教義を諭す、聖書や賛美歌を引用する、あるいはキリスト教的価値観に基づいた描写が長々と続く部分に関してはキリスト教徒でない日本人読者に配慮して大幅に割愛することにしたのかもしれない。

そうだとすると、少なくとも美知代自身は翻訳にあたって原著に描かれている幼子と別れることの辛さや天折に対するストウのことば、あるいは天使のような純粋さのまま神のもとへと旅立った「イバの死」に関する描写などを読んでいることは確かだろう。それらが美知代に影響を与えた可能性は十分考えられる。

さらに、ストウの息子によってまとめられた自伝が一八八九年に出版されていることもあり、¹⁹⁾ 美知代はストウの生涯に関する情報を詳しく知ることができたはずである。美知代訳『奴隷トム』巻頭の「例言」にあるストウの記述を見ても、美知代が何らかの方法でストウの著作だけでなく、ストウ自身に関する詳細な情報

を得ていたことが推測できる。そこから、美知代が『アンクル・トムの小屋』の翻訳を行うにあたり、その内容だけでなく著者ストウの生涯に対しても共感を抱いていた可能性が考えられる。

先述したようにストウが黒人奴隷への共感を引き出すストラテジーとして、あるいは人種の区別なく与えられるキリスト教的博愛の力を示すために別離の場面を描いたことは確かであろう。しかし、そこで描かれる幼い我が子との別離の描写は、ストウ自身の経験に即した真に迫るものであり、同様の経験を持つ美知代にとっては、奴隷解放に関するストウの思想とは異なる角度で『アンクル・トムの小屋』に抱く特別な共感があつたのではないだろうか。

その二 ストウの思想、女性の改革に関して

渡辺によれば、ストウ自身は女性社会改革運動に参加することはなかったが、その理念に賛同していたことは確かだという。『アンクル・トムの小屋』には、奴隷制度に無批判であったり、優柔不断な態度にとどまったりする男性たちが描かれる一方で、そのような男性性に対して奴隷制度の非人間性を指摘し、矛盾を明らかにし、奴隷の解放を訴える多くの女性たちが描かれる。

一般的に、男性は、良くも悪くも、現体制に組み込まれていて、社会機構を根底から覆すことは期待できない。それに対して、女性は家庭内に閉じ込められ、その関心は家庭内の問題に限られるといわれるが、社会的な利害関係に制約されていないだけに、奴隷制度の究極的な悪を批判する

視点をもつことができるのではないか。ストウは女性の領域は家庭であるという神話を否定し、女性による社会変革という意味で、フェミニズム思考に先鞭をつけたと評価できらる²⁰。

また、野口が指摘するところでは、産業革命によって労働から切り離された家庭は休息のための私的領域という性質が強くなり、家庭における宗教教育の重視と相まって「家庭の神聖化」が生じたという。「家庭は小さな教会となり、それを管理する母は家族を教え導く聖なる指導者に高められた」というわけである²¹。

著者ストウにとっては第一の目的に奴隷制度の撤廃があり、奴隷制度に関する経済的な利益や法的擁護を乗り越えてその非道さを告発するために女性による語りを用いたというのは首肯できる。ただ、翻訳者の美知代としては夫に対して明確な主張を行い、あるいは信念に従って行動をとるという『アンクル・トムの小屋』に描かれる妻たちの姿勢が、家庭内で「新しい女性」を目指す上でのひとつの実践例のように捉えられたのではないだろうか。

そこで、以下では女性の登場人物に焦点を当て、『アンクル・トムの小屋』と美知代との関係を考察したい。ここで取り上げるのは、奴隷制度を擁護し、あるいは目を背けようとする男性の主人たちに対して真つ向から対立する三人の女性たちである。

一人目は「エミリー」で、農場主セルビーの妻である。借金の返済のために、セルビーはトムとまだ幼いハリ坊を奴隷商人に引き渡す契約を結んでしまうが、それを知ったエミリーがセルビー

を責める場面である。

「屹度神様のお罰です、奴隷にも、主人にも、苦い苦い神様のお罰です。私は始終さう思つてますのよ、小娘の時分から思つてる事ですけれど、これを改善するには、何と云つても自由が一番です。」

「まるで奴隷廃止論者だね。」

「さうです、奴隷廃止論者、私どうしたつて奴隷制度を正しいとは思はれませんもの、私にしたつて心から奴隷を持ち度いとは思いませんもの。」

(美知代訳、五三―五四頁)

エミリーはハリ坊を売るという事件が起こるまでキリスト教徒としての信仰や道徳を奴隷たちに説いてきており、家族の大切さを重視してきた。そうした奴隷主としての態度を反故にし、事業の失敗を理由に奴隷の家族を引き裂くのはあまりに不道徳であり残酷な行いであると夫を非難するのである。しかし、一家の主であるセルビーの一存で譲渡契約は既に済んでおり、エミリーには契約を覆すことは叶わない。それでも、エリザがハリ坊を連れて逃亡したことを知った後、エミリーは奴隷商人が追跡し始めるのを妨害し、他の奴隷にも妨害するよう示唆してエリザの逃亡を間接的に助けるのである。最終的にはこの妨害によりエリザは逃亡に成功するため、物語の筋としてはエミリーの思惑どおりになつたと捉えることもできる。

また、トムが奴隷商人に引き取られる場面では、主人のセルビーは自らの行いに対する後悔によつて状況を直視できなくなり、別の用事にかこつけて農場から姿を消す。その際もエミリーはトムの見送りを担い、代金ができ次第トムを買い戻す約束するのである。

セルビー夫人は知識も徳行も優れて立派な人であつた。或る人はそれをケンタツキー婦人の特性だとも云つてゐる。大な心の上に、彼女はまた非常な慈愛心を持つてゐた。セルビーは夫人の此性質を随分に尊敬し、幾分畏敬もした。

(美知代訳、一八頁)

ここで、セルビーは家庭・農場・奴隷の主人として社会的な権利を持つてはいるものの、事業に失敗して奴隷を売る羽目になり、またその現実を直視することも叶わない者として描かれる。一方でエミリーは、妻として奴隷制そのものを糾弾し、夫を説得することは叶わなかったが可能な限り抵抗を続ける立場として描かれる。また、セルビーが雲隠れした際には奴隷商人とのやり取りを担うほか、物語の終盤でセルビーが死去した後は、エミリーが堅実に農場の仕事进行处理していることが示される。

二人目は「メアリ」で、上院議員ポイドの妻である。オハイオ川を渡った先でエリザが匿われるのがポイドの家であるが、エリザが到着する直前、逃亡奴隷法を推進するポイドとそれに反対するメアリの激しい議論が描かれる。メアリの性格は以下のように描写されている。

バード夫人は内気で慎み深い小柄な女性で、(中略)彼女にとつては夫と子供が世界のすべてであつて、命令したり議論したりするよりは、頼んだり納得してもらふことで家を切りまわしていた。だが、ただ一つだけ彼女を怒らせてしまふものがあつた。なんであれ残酷なものの表われには、彼女は激しい憤りを示したが、それは彼女の並外れてやさしい思いやりの気持ちからきていた。

(小林監訳 一〇四頁)

このように、メアリは日常生活では穏やかに振る舞う一方で、不正だと考えるものに対しては断固として反対する人間として描かれる。公益などを理由に、なんとか逃亡奴隷法を擁護しようとするボイドに対し、メアリはそもそも奴隷が逃亡するのはその待遇に問題があるのだと論理的に主張を行う。その後現れたエリザの存在はメアリがボイドを説得する後押しとなり、最終的にメアリはボイドの説得に成功するのである。

三人目は「オフエリヤ」で、物語の中盤以降に登場する。トムにとつて第二の主人となるセント・クレヤーの従姉にあたり、屋敷に手伝いとして訪れている。オフエリヤもメアリと同様、奴隷制に加担しているセント・クレヤーの立場を激しく問いたです。このセント・クレヤーは決して奴隷を残酷に扱っているわけではない。むしろ、奴隷制に疑問を抱く立場でありながら明確な判断や行動を避け、奴隷に好き勝手にさせておくことで奴隷制に向

き合わないようにしている人物として描かれる。

オフエリヤもメアリと同様に奴隷制度に反対する立場として、セント・クレヤーと長い議論を交わす。最終的に、オフエリヤは半ば厭世的に奴隷制度を受け入れているセント・クレヤーを説得し切ることはできないものの、大きく揺さぶりをかけることでセント・クレヤーを真剣な議論へと導く。それは、正面から奴隷制度に向き合うようセント・クレヤーを導くと同時に、後に語られるイバの死を通じてセント・クレヤーが改心するための土台を準備したとも捉えられる。セント・クレヤーに真面目さを取り戻させたのは、紛れもなくオフエリヤ自身が真摯に自身の立場と主張を述べ立てたことによる。

また、別の場面では奴隷の少女トプセイの教育がオフエリヤに委ねられる。その際、オフエリヤは主人であるセント・クレヤーが死亡しても動産として処分されることがないように権利の受け渡しを持ちかけ、説得に成功する。ここでも、完全にセント・クレヤーの姿勢を変容させ奴隷制度の撤廃に向けて動くよう仕向けることこそできないものの、議論を通じて可能な限りの合意を導き出していると言える。なお、この合意が極めて重要であったことは、後にセント・クレヤーの死によつて他の奴隷が売り払われ、てしまうことにより、裏付けられる。

以上のように、『アンクル・トムの小屋』では、家庭における主人や奴隷を扱う農場主として決定権を持ちながらも、制度に対してジレンマに陥ったり曖昧な態度にとどまったりする男性が登場する。そして、そのような男性に対置される形で、毅然とした態度で

主張を行う女性たちが描かれている。セルビーに対するエミリー、ボイドに対するメアリ、セント・クレヤーに対するオフェリヤ、というように各場面でこの構造が繰り返されているのである。

ストウ自身は積極的には政治運動に参加しなかったことは先述したが、このような女性の登場人物からストウの立場が見て取れる。そして、このような姿勢は美知代にとつて、「新しい女性」の実践例として魅力的に映ったのではないだろうか。もちろん、ここで描かれている女性たちは社会の中でサラリーを得る仕事をしながら目覚ましい活躍する、という類の「新しい女性」ではない。しかし、静雄と結婚して家庭生活を送る中で、美知代は家庭内で実践できる「新しい女性」の形を探しており、それが『奴隷トム』の翻訳活動を行う理由の一つとなつたのではないだろうか。美知代は『奴隷トム』の序で以下のように述べている。

デモクラシーとか労働問題とか、さうした事が日一日と人釜しく騒がれて、あらゆる階級制度は打破され、古き道徳は新人の前に何等の価値もなく尊厳をも認められない当代、子たるものゝ道、親たるものゝ義務、妻の夫に対する態度、主従の関係と云つたものを、極めて正当に教え導く読み物があつたとしたら、それはどんなに重要なものであらうか。

(美知代訳、二頁)

先述の女性たちはいずれも、基本的な奴隷の所有が男性主人にあるという制約がありながら、その中で積極的に意見を主張し、

変革を求める女性像として描かれている。それを「新しい女性」の一つの形として認め、日本社会に投げかける意図を美知代は持っていたのかもしれない。

さらに美知代自身について言えば、職業を持つ者としての「新しい女性」像を家庭内で諦めてしまう必要も全くない。作品から作者へと目を移せば、「ストウ夫人」という未曾有の成功を収めたモデルが実在するからである。推測ではあるが、『アンクル・トムの小屋』に描かれるこのような女性像やストウの作家としてのあり方は、美知代が翻訳後に渡米する動機の一つとなつたのではないだろうか。ストウの死後しばらく経過しているが、渡米は当時の「新しい女性」モデルをアメリカの地に見出していたことだったかもしれない。

五 おわりに

以上、美知代と『アンクル・トムの小屋』との関係について、「子どもとの死別」および「家庭内における女性の主張」という二つの視点から考察を行った。美知代がこの作品を翻訳するに至った背景として、キリスト教信仰のあり方や道徳的規範に寄与するという理由のみならず、美知代個人にとつての作品への思い入れ、あるいは美知代のストウに対する共感があつた可能性を提示できたかと思う。

もちろん、本稿ではあまり言及できなかったものの、『アンクル・

トムの小屋』は全編を通してキリスト教の影響が常に存在している。熱心なキリスト教信者だったという美知代が、信仰面からも『アンクル・トムの小屋』²³⁾そして著者ストウの姿勢に共感を覚えたであろうことは想像に難くない。

本稿で扱い切れなかったものとして、美知代のもう一つの翻訳である『愛と真実 ジョン・ハリファックス』との比較や同時代の翻訳作品との比較などがあり、まだ不明な点が多い。さらに、翻訳活動における夫・永代静雄の影響も興味深い。静雄はルイス・キャロル『不思議の国のアリス』を『アリス物語』として翻訳・出版しており、²⁴⁾美知代と翻訳の手法についてやり取りがあったことは十分想定できる。実際、美知代と静雄は一九一七年に入籍し一九二六年に離婚しているが、美知代の翻訳書はこの期間に出版されている。ここから、例えば二人が翻訳の上でどのような語句を選択しているか比較することで、結婚生活の間に行われた翻訳談義が明らかになるかもしれない。こうした点を今後の課題としたい。

付記

原文引用はストウ夫人原著・永代美知代訳『奴隷トム アンクル・トムス・ケビン』誠文堂、一九二三年およびH・B・ストウ著・小林憲二監訳『新訳 アンクル・トムの小屋』明石書店一九九八年による。引用にあたって旧字体を新字体に改めた。引

用部分の傍線・中略は筆者による。

また、登場人物名は美知代訳のもの小林監訳のもので表記にゆれがあるが、本文中では美知代訳のものに統一している。文献の名称については、表記を『アンクル・トムの小屋』で統一した。ただし、美知代の翻訳書として特別に言及する際は『奴隷トム』を用いた。

注

- (1) 有元伸子・府中市上下歴史文化資料館編『岡田（永代）美知代著作集』溪水社、二〇二二年。およびウェブサイト「広島的女性作家 岡田（永代）美知代」
<https://okadamichiy.hiroshima-u.ac.jp/index.html>
(最終閲覧日：二〇二四年二月九日)
- (2) 有元伸子「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（1）…研究の現状と課題」『内海文化研究紀要』第三九号、二〇一一年三月）五八頁。および、有元伸子「広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（2）…著作の概要」『広島大学大学院文学研究科論集』第七一巻、二〇一一年二月）二二頁。
- (3) 川戸道昭・榎原貴教編『児童文学翻訳作品総覧 第7巻【アメリカ編】』大空社、二〇〇六年、一九八―二〇九頁。および清水真砂子・八木田宜子編『英米児童文学年表・翻訳年表』研究社、一九七二年。

- (4) ハリエット・ビーチャー・ストウ著、土屋京子訳『アンクル・トムの小屋』光文社、二〇二三年。
- (5) ジェームス・M・バーダマン著、森本豊富訳『アメリカ黒人史』筑摩書房、二〇二〇年、六八―七七頁。
- (6) 注5に同じ。七九頁。
- (7) 渡辺利雄『講義 アメリカ文学史 第1巻』研究社、二〇〇七年、三九―一頁。
- (8) 永代美知代訳『奴隷トム』巻頭の例言(七頁) および巻末の広告を参照。
- (9) 注5に同じ。八一―八二頁。
- (10) 岸上眞子「作家解説Ⅱ ストウ」(寺門泰彦ほか『アメリカ文学案内』朝日出版社、二〇〇八年) 一九二頁。
- (11) 注7に同じ。三九〇―三九二頁。
- (12) 注7に同じ。四〇三頁。
- (13) 注7に同じ。三九二頁。
- (14) 野口啓子『アンクル・トムの小屋』の政治的感化力とキリスト教」(高野フミ編『アンクル・トムの小屋』を読む』彩流社、二〇〇七年) 六九頁。
- (15) 高野フミ「ハリエット・ビーチャー・ストウ」(高野フミ編『アンクル・トムの小屋』を読む』彩流社、二〇〇七年) 二四頁。
- (16) 注14に同じ。
- (17) 鈴木茂々子『ストウ夫人の肖像』ヨルダン社、一九八四年、一三七―一四〇頁。
- (18) 注1に同じ。二二〇頁。美知代の長女・千鶴子の病死のこと。またウェブサイトに「広島の女性作家 岡田(永代)美知代」、「作家紹介」のページ内、「3 再上京と結婚・出産」の項目にも千鶴子の出産や病死について紹介されている。
- (19) Charles Edward Stowe, *Life of Harriet Beecher Stowe: Compiled from Her Letters and Journals* (MA: Houghton, Mifflin, and Company, 1889)
- (20) 注7に同じ。四〇四頁。
- (21) 注14に同じ。六六―六七頁。
- (22) 注1に同じ。二三九―二四三頁。有元は「美知代の少女小説の特徴は、同時代の良妻賢母志向とは異なり、一定以上の教育を授かることのできる階層であれば、女性も十分に知的な営みが可能であり、勇気をもって自身で未来を切り拓いて行くべきだというメッセージがこめられていることにある」と述べている。また、新聞に連載された「女子大学英文科出身 新夫人の打明話」では、妻と夫が対等に合理的議論を行い、正しいと信じる主張を貫く妻のあり方が描かれている。
- (23) キャロル原作、永代静雄著『アリス物語』紅葉堂書店、一九一二年。
- (もりにく) ゆい、広島大学大学院人間社会科学科博士課程前期

Michiyo Nagayo as a Translator: Focusing on the Background of the Translation of *Uncle Tom's Cabin* and Michiyo's Commonalities with Harriet Beecher Stowe

Yui MORIKUNI

Key Words: Nagayo Michiyo, Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin*

The female writer Nagayo Michiyo was active from the end of the Meiji era to the end of the Taisho era. In addition to writing many novels targeting females and children, Michiyo also translated some books. This paper focuses on Michiyo's translation of Harriet Beecher Stowe's *Uncle Tom's Cabin*. Specifically, it examines the reasons for the translation, with a focus on the similarities between Michiyo's and Stowe's lives. First, the paper reviews the history of African Americans in the United States, as the background for the original *Uncle Tom's Cabin*, and discusses the impact of the original book's publication. Next, it focuses on two commonalities between Stowe and Michiyo: their bereavement due to their children's deaths and the idea of reforming women's image. This leads to a discussion of Michiyo's motivations and intentions in translating this work.